

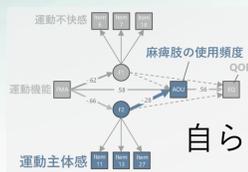
“運動を制御している”という感覚の運動主体感 — 行動変容を実現するための理論構築とその検証 —

臨床で直面した解決すべき課題



運動障害を有する方では
補助により身体を“動かされる”

「自分が運動している感じがしない」



- ・ 運動学習の阻害
- ・ 運動頻度の減少

臨床経験

自らの研究により解明

運動主体感の低下が
リハビリの効果を奪う

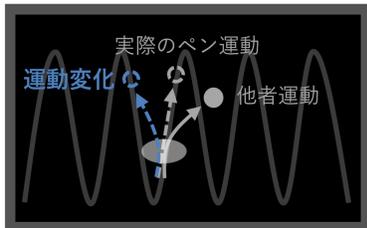
② モデルの理論検証

従来の問題点：運動主体感の評価は主観指標に依存

実験心理学の研究技術
である要因計画法を活用



運動指標による
定量化手法を応用し
心理モデルの要因を操作



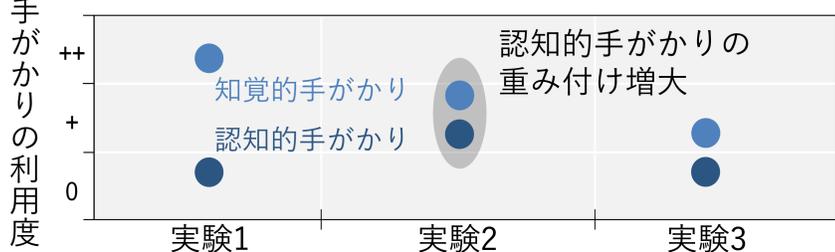
運動指標による定量化

運動主体感の実験上での

“定量化と操作”を実現

健常者を対象にモデルを検証

心理モデルを支持する運動主体感の推定結果

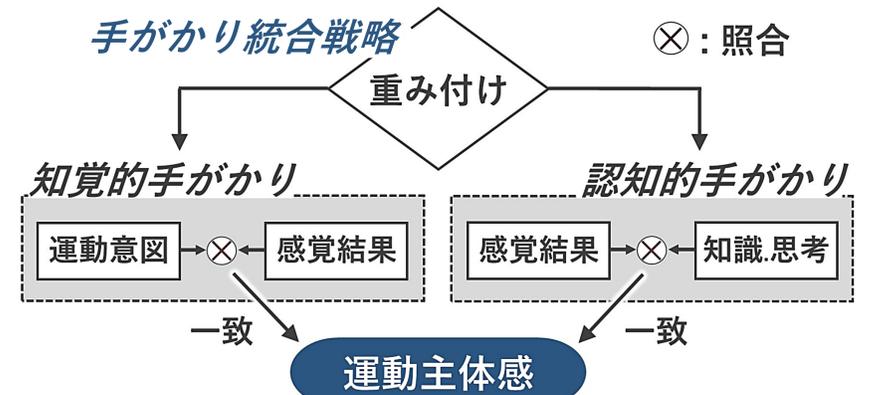


実験2：知覚的手がかりの情報量を減少させた
状況では認知的手がかりの効果が出現

運動制御時の運動主体感推定戦略を示唆

① 運動主体感のモデル構築

運動主体感の操作に向けて独自モデルを構築



状況に応じた**戦略の変化**を仮説

③ モデルの臨床応用

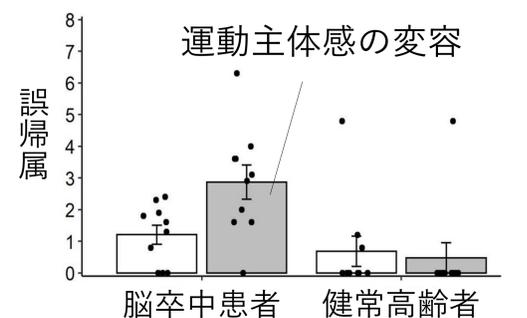
心理モデルを活用し脳卒中患者の運動主体感を検証

累計150例以上の
大規模研究を展開

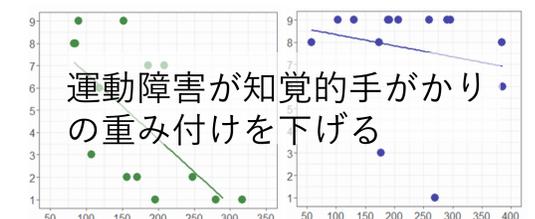
多施設連携とデータベース構築



患者特異的な
運動主体感の変容



認知的手がかり
に依存した
手がかり統合戦略



運動障害による
戦略変容を説明

推定戦略 | 健常者：知覚的手がかりに基づく戦略
患者：認知的手がかりに基づく戦略

運動主体感の操作には戦略の評価が必要

まとめ

運動主体感の心理モデル構築と、実験上での定量化と操作を実現
運動主体感の推定戦略が状況に応じて変化することを実証